

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月24日現在

機関番号：20104

研究種目：基盤研究(B)一般

研究期間：2008～2011

課題番号：20330107

研究課題名（和文） 「世代間の育児支援」からみた祖父母とその子世代の関係構築に関する実証的研究

研究課題名（英文） Research on the relationship between grandparents and their children from the perspective of "child support between the generations"

研究代表者

小野寺 理佳 (ONODERA RIKA)

名寄市立大学 保健福祉学部 教授

研究者番号：80185660

研究成果の概要（和文）：祖父母からその子世代への育児支援に関する調査を日本およびスウェーデンにおいて実施し、支援の実態および世代間の思いのずれに着目して分析をおこなった。その結果、両国において、公的な育児支援がカバーしきれない部分を担う存在として祖父母世代が重要な役割を果たしていることが確認された。しかしながら、祖父母が育児支援を含めて子世代の生活に関与しようとする（せざるをえない）範囲や程度は日本の方がより大きいことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：

We conducted a survey on child care in Japan and Sweden. In that survey, we asked questions about the help for child care between the generations. We explored the contents of the support, the frequency of the support, and the idea of support. In Japan and Sweden, grandparents had played an important role. Their role was to supplement the public child-care support system. Japanese Grandparents, compared with the grandparents of Sweden, had been more deeply involved in the life of a child.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2009年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2010年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2011年度	2,400,000	720,000	3,120,000
年度			
総計	12,200,000	3,660,000	15,860,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学：社会学

キーワード：祖父母、育児支援、世代間関係、移民の保育、地域社会

1. 研究開始当初の背景

従来、祖父母世代は子世代の育児の支援者として一定の役割を果たしてきたが、三世同居の減少により祖父母の役割は縮小したという見方がある。しかしながら、家族の多様化（離婚や再婚の増加、それに伴うシングルペアレントやステップファミリーの増加など）や共働き世帯の増加を受けて、公的な

育児支援がカバーしきれない部分を担う存在として、祖父母の重要性が今以上にクローズアップされる可能性が高まるという見方も成り立つ。祖父母世代が今どのように子世代との関係を築いているのか、その新しいスタイルを具体的にとらえることが求められている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、現代社会における祖父母世代とその子世代(孫の親世代)との関係を、「世代間の育児支援」を軸として明らかにすることである。現代の祖父母世代はもはや家族のなかだけに埋没して生きる存在ではなく、選択的に育児支援をする存在、即ち、選択的に世代間関係をつくる存在とみることができる。祖父母の多様な条件(経済的条件、職業など)やジェンダーに即した分析により、世代間関係がいかなる条件からいかなる影響を受けているのかを子細にとらえることを目指した。その際、家族の多様化および社会福祉サービスの展開における先達であるスウェーデンとの比較、都市部と過疎地域との比較をおこなうことによって、日本における世代間の育児支援の状況をより鮮明に浮かび上がらせること、それによってわが国の世代間関係の特徴や課題をより正確に把握することを期した。

3. 研究の方法

本研究においては、日本とスウェーデンにおいて、都市部と過疎地域の2地域を選定し、保育機関と学校調査にて配付調査およびインタビューをおこなうという方法を採用した。通園・通学する子どもの保護者と祖父母世代を対象として、同一家族内の祖父母世代とその子世代の関係を具体的にとらえることを目指した。具体的には、育児支援の実態の他、育児観、育児支援観、ジェンダー観、親子関係観、夫婦関係観などを探った。学校調査においては、通学児童本人を対象として「孫の視点からみた祖父母」を明らかにし、祖父母とその子世代の関係を多角的に把握した。

4. 研究成果

世代間の育児支援の実態および育児支援をめぐる祖父母と子世代、さらには孫世代の思いのずれに着目して分析をおこなった結果、以下の諸点が明らかになった。まず、国内調査から明らかになったことを掲げる。

(1) 育児と就労の両立をするうえで子世代から大きな期待を寄せられているのは、祖父母や親族、配偶者、保育所や延長保育であり、なかでも、祖父母や親族に対する期待と彼らが実際におこなっている支援が重要な部分を占めている。

(2) 祖父母からの育児支援は精神的支援を中心ににおこなわれており、おしゃべりを通じたリラックスや、干渉せずに見守るといった対応が子世代から求められ、祖父母も、身近な育児経験者として子世代の育児を精神的に支えることを責務と考えている。一方、経済的な支援では、物品面での支援が主であり、金銭的な支援は特別な出費が必要な場合な

どに限定されている。また、日常的な支援においても、日々の生活のなかでの定期的な支援が期待されるというよりは、孫や母親が病気の場合の看病や、夜間・休日に親が不在である場合の孫の世話などのように、緊急時に当てにできる存在として頼りにされている。

(3) これら祖父母からの育児支援は母方中心になされている。子世代との同居理由においても、母方祖父母においては多くが「子世代に経済的に協力するため」という理由をあげるのに対し、父方祖父母の場合は「子どもが跡継ぎだから」という理由をあげる者が多い。特に母方祖母の場合、「共働きなので、育児を助けるため」という理由をあげる者が祖父母4者のなかで最も多く、母親への協力が志向が強い。日常的支援の多くは母方祖母によるものであり、また、精神的な支援においても、母方祖母は育児に関わる具体的な相談相手を務めている。他の祖父母3者と比べると、子世代の育児により深く関わっている。

(4) 子世代は、祖父母から受ける育児支援の現状に基本的に満足している。また、今後も同様の育児支援のあり方が継続することを期待している。その際、子世代は、育児支援をめぐる祖父母の負担感や不安を十分に理解しているとはいえない。というのも、現実には、祖父母は、育児支援を継続する意志をもちつつも、自身の就労との両立や高齢化に伴う体力低下および経済的負担に関わる悩みを抱えているからである。また、祖父母の経済格差が支援の格差をもたらすとの認識も存在する。

(5) 育児支援は、子世代においては、祖父母が「孫かわいさ」ゆえにおこなっているものと専ら認識されており、祖父母が現在の労働・生活と折り合いをつけながら、子世代の育児負担を軽減させようとして支援をしているという理解はあまりなされていない。従って、子世代から祖父母への返礼は誕生祝などに限定されている。一方、祖父母にとっての育児支援とは、母親の就労、母方にとっては「娘」の職業生活を維持あるいは促進させながら孫を含めた子ども家族の生活を守ることにある。この支援は、親子間の私的支援としておこなわれていると同時に、公的支援の空白を埋める社会的貢献として、すなわち祖親期にある中高年世代の社会的責任の自覚にも支えられたものである。祖父母において、育児支援が将来の子世代による介護を保障するものとは基本的には捉えられていない。

(6) 孫と祖父母の関係をみると、祖父に比して祖母との関係が緊密である。

(7) 孫は、父方祖父母よりも母方祖父母の方とより密接な関係性を築いている。それは、母親が家事・育児を気安く頼める実母=母方祖母との日常の接触頻度が高いためと思わ

れる。この関係性の相違は孫の祖父母に対する意識にも影響を与えており、父方よりも母方祖父母に対する好感度が高い。

次いで、国内調査において得られた上記の諸点とスウェーデンでの調査の結果を照らし合わせてみると、次のような点が指摘された。

(1)日本とスウェーデン両国において、公的な育児支援を補完する存在として祖父母世代が重要な役割を果たしていることが確認された。

(2)スウェーデンにおいても、祖父母からの育児支援は母方中心におこなわれる傾向がある。母方祖母においては自身が実母の支援を受けて育児をした経験をもつ者が多くみられ、育児支援における母系のつながりの存在が示唆される。

(3)日本の祖父母と比較すると、子ども一家の幸せのために尽くしたいというよりも、子世代や孫世代と楽しく交流したいとの思いが主であり、「自分がその交流を楽しめるか」という点が重視されている。

(4)スウェーデンでは、育児において親がすべきことと祖父母など親以外がしてもよいことが区別されており、祖父母は育児の周辺のことを手伝うだけという認識が強い。日本のように、子世代の育児により深く関わることで子世代一家との関係が強くなり、そのことが祖父母に安心感や充実感を与えている例は多くはない。

(5)支援意識や支援スタイルの違いは主に個人の条件（経済的条件、地理的条件など）やもともと親子の親密度に因るもので、母方と父方の違いについては日本のように明確なものとはみられない。祖父母が育児支援を含めて子世代の生活に関与しようとする（せざるをえない）範囲や程度は日本の方がより大きい。

近年は、近隣に居住しながら祖父母世代とその子世代が支え合うスタイルの増加傾向が指摘されている。今後は、家族関係をめぐったこうした流れを見据えながら、世代間の育児支援の問題（公的な育児支援が充実していけば世代間の育児支援は減るのか、親族ケアの質がよいと考えられているならば減ることはないのか。祖父母のライフスタイルはどのように変容していき、それに伴って、可能な支援のありようはどのように変化するか。そのとき、両世代の経済的背景はどのように影響するのか、など）を検討していく必要があるだろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文（査読なし報告書）〕（計7件）

1. 野崎剛毅、スウェーデンの移民事情、小野寺理佳編著『スウェーデンにおける移民の保育と住民自治』（世代間関係・研究報告書 no. 2）、2012年、1-6p.

2. 小内透、移民の保育からみたスウェーデンの多民族社会、小野寺理佳編著『スウェーデンにおける移民の保育と住民自治』（世代間関係・研究報告書 no. 2）、2012年、7-26p.

3. 小内純子、スウェーデン中北部・イエムトランド県における住民組織と住民自治～オーレコミューン・クビツレ集落を事例に～、小野寺理佳編著『スウェーデンにおける移民の保育と住民自治』（世代間関係・研究報告書 no. 2）、2012年、27-42p.

4. 新藤慶、保護者からみた世代間の育児支援、小野寺理佳編著『「世代間の育児支援」からみた祖父母とその子世代の関係』（世代間関係・研究報告書 no. 1）、2011年、7-39p.

5. 品川ひろみ・野崎剛毅、孫世代からみた世代間の育児支援、小野寺理佳編著『「世代間の育児支援」からみた祖父母とその子世代の関係』（世代間関係・研究報告書 no. 1）、2011年、41-53p.

6. 小野寺理佳、祖父母からみた世代間の育児支援、小野寺理佳編著『「世代間の育児支援」からみた祖父母とその子世代の関係』（世代間関係・研究報告書 no. 1）、2011年、55-85p.

7. 小野寺理佳、祖父母世代の育児支援意識—祖父母世代への追加調査から—、小野寺理佳編著『「世代間の育児支援」からみた祖父母とその子世代の関係』（世代間関係・研究報告書 no. 1）、2011年、87-130p.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小野寺 理佳 (ONODERA RIKI)
名寄市立大学 保健福祉学部 教授
研究者番号 80185660

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者

小内 純子 (ONAI JUNKO)
札幌学院大学 社会情報学部 教授
小内 透 (ONAI TORU)
北海道大学 大学院 教育学研究院 教授
品川 ひろみ (SHINAGAWA HOROMI)
札幌国際大学短期大学部 幼児教育保育学科 教授
野崎 剛毅 (NOZAKI YOSHIKI)
國學院大學北海道短期大学部 幼児・児童教育学科 准教授
新藤 慶 (SHINDOU KEI)
群馬大学 教育学部 准教授